東京帝国大学本郷キャンパスにおける内田祥三による折衷表現の成立と展開

内田祥三と岸田日出刀の協働による意匠設計

UCHIDA YOSHIKAZU'S ECLECTIC DESIGN OF THE HONGO CAMPUS OF TOKYO IMPERIAL UNIVERSITY

The Collaboration between Uchida Yoshikazu and Kishida Hideto

常松 祐介^{*1}

Yusuke TSUNEMATSU

This paper examines how the eclectic design of the Hongo Campus of Tokyo Imperial University was developed through the collaboration between Uchida Yoshikazu and Kishida Hideto. Previous studies focused on the uniformity of the collegiate gothic style on the campus, but overlooked its variety of expressions. First, this paper indicates that in the early the 1920s, Kishida introduced modern-style designs in seven buildings. Second, this paper argues that since the late 1920s, Uchida not only adopted the gothic style, but also repeatedly applied the modern-style designs introduced by Kishida with consideration of the aesthetic harmony of the surrounding buildings.

Keywords: Uchida Yoshikazu, Kishida Hideto, Hongo Campus, Collegiate Gothic, Expressionism, Eclecticism

内田祥三, 岸田日出刀, 本郷キャンパス, カレッジ・ゴシック, 表現主義, 折衷主義

1. 研究の背景と目的

明治期の建築家が、専ら個々の建築の意匠に目を向け、記念性の高い表現を多用したのに対して、大正期以降の建築家は、都市景観への配慮の下、建築間の意匠の調和を志向するようになった^{注1)}。この間、景観の調和への配慮の下、設計がなされた事例として、大学のキャンパス計画が注目され、研究が蓄積されてきた^{注2)}。中でもキャンパス景観の形成過程を主題とした代表的な研究として、早稲田大学キャンパス計画に関する研究が挙げられる^{注3)}。当研究では、大正期以降、佐藤功一によって統一的なキャンパス景観が計画され、その設計手法が大学営繕課の間で継承されたことが明かされている。

このように、一人の建築家の存在がキャンパス計画に影響を与え続けた早稲田大学に対して、同時期の東京帝国大学本郷キャンパスでは、内田祥三（1885-1972）と岸田日出刀（1899-1966）という2人の建築家とその計画に大きな影響を与えた。内田は、1910年代後半から1930年代後半まで構内の30棟以上の建築設計に関与し、関東大震災後、営繕課長事務取扱としてキャンパスの復興を主導した^{注4)}。こうして形成されたキャンパス景観は、その意匠からゴシック表現によって統一されたものと評価されるが^{注5)}、各建物の立面表現がどのような展開を見せたのか、通時的な分析は行われてこなかった。

一方、岸田は1920年代、表現主義的な新表現を用いて、構内の数点の作品を設計したことが知られている^{注6)}。このように、様式表現とともに表現主義的な新表現が見られる景観は、本郷キャンパスならではの特徴と言える。しかし従来の研究では、岸田の貢献はあく

まで一部の作品に限られたものと理解されており、その表現がキャンパス全体に与えた影響は検証されてこなかった^{注7)}。さらに、岸田の貢献が厳密に検証されてこなかったため^{注8)}、構内の多数の建物のうち、一部の岸田作品の存在が見落とされてきた。

こうした従来の理解に対して、本研究ではまず1920年代前半の本郷キャンパスを対象に、ゴシック表現による景観の「統一性」ではなく、内田と岸田の協働を背景とした表現の「多様性」に注目する。この間の作品の細部表現を詳細に検討すると、実に様々なバリエーションが確認される。こうした構内の多様な細部表現については杉山によって分類が試みられているが^{注9)}、杉山は表現の多様性を生み出した背景としての内田と岸田の協働関係に検討していない^{注10)}。

続いて、1920年代後半から1930年代を対象に、当初の多様な細部表現がその後どのような展開を見せたのか、明らかにする。従来の研究の関心は、大講堂や図書館などの主要校舎が設計された1920年代前半に集中しており、その後の時期については注目されていない。特に1920年代前半に岸田が用いた表現が、その後のキャンパスに与えた影響については全く着目されてこなかった。1920年代後半以降、岸田は構内の設計活動にほとんど関与しなくなっていくが^{注11)}、本研究ではこの間、内田や他の東京帝国大学営繕課（以下、東大営繕課）の技師によって、当初の岸田の表現がどのように「継承」されていたのか、その影響を検証したい。

以上のように本研究では、①1920年代前半、内田と岸田の協働によって本郷キャンパスの表現に「多様性」がもたらされ、②1920年

^{*1} 東京大学工学系研究科建築学専攻 院生・修士（工学） Grad. Student, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, The Univ. of Tokyo, M.Eng.

代後半以降、内田を中心として多様な表現が「継承」されていく過程を分析していく。本論では特に、統一された一定の表現が用いられるのではなく、多様な表現が併用されつづけ、さらに異なる表現が組み合わせられていくような傾向を「折衷表現」と定義し、内田によって独自の折衷表現が展開されていたことを明らかにする。

なお本論文のうち、1920年代前半の本郷キャンパスにおける岸田の貢献については常松による研究（参考文献1）を参照し、その上で1920-30年代の内田と岸田による設計活動を包括的に論じる。

2. 研究の手法

2.1. 研究の対象

本研究では、1910年代後半から1930年代後半にかけて、内田が本郷キャンパスの設計活動を率いた期間を対象とし^{注12)}、①この間の構内の設計作品を分析するとともに、その背景にある②内田と岸田の協働関係や③内田と岸田の設計思想について考察していく。なお、

Table 1 List of major buildings in Hongo campus (1922-1938)

▽岸田の欧米外遊前 (Before Kishida went abroad)

	Y/M	A	B1	B2	C1	C2
1 工学部第二号館 (Bldg.1 of Engineering)	1922 6					
2 大講堂 (Main Hall)	1923 1	○				
3 工学部列品館 (Museum of Engineering)	1923 6		○			
4 医院及廂所 (Hospital & Dining Room)	1923 12	○				
5 法経済学部研究室 (Lab. of Law & Economy)	1924 2		○			
6 工学部第四号館 (Bldg.4 of Engineering)	1924 4	○			○	○
7 理学部第一号館 (Bldg.1 of Science)	1924 6	○				
8 耳鼻咽喉科病室 (Dept. of Otolaryngology)	1924 8	○				
9 薬学教室 (Bldg. of Pharmacy)	1924 8	○				
10 急病者受付所 (Medical Office for Emergency)	1925 7	○				

▽岸田の欧米外遊後 (After Kishida returned from abroad)

11 図書館 (Library)	1926 1		○	○		
12 農学部第一号館 (Bldg.1 of Agriculture)	1926 8					
13 内科病室 (Internal Dept.)	1926 12				○	
14 隔離病室 (Isolation Dept.)	1926 12				○	○
15 地震研究所 (Lab. of Seismology)	1927 3					
16 法文経教室第一号館 (Bldg.1 of Law, Lit. & Econ.)	1927 5		○			
17 法文経教室第二号館 (Bldg.2 of Law, Lit. & Econ.)	1927 5		○			
18 医学部第一号館 (Bldg.1 of Medicine)	1928 3					○
19 理学部第二号館 (Bldg.2 of Science)	1929 3					○
20 工学部第一号館 (Bldg.1 of Engineering)	1929 5		○			
21 電気工学実験室 (Lab. of Electrical Eng.)	1929 12				○	

▽岸田の営繕課退任後 (After Kishida retired from the department of Eizen)

22 内科及小児科研究室 (Lab. of Pediatrics Dept.)	1931 3				○	
23 外来患者診療所 (Hospital for Outpatient)	1931 3				○	
24 農学部第二号館 (Bldg.2 of Agriculture)	1932 8					
25 学生食堂 (Student Dining Room)	1933 7					
26 医学部第二号館 (Bldg.2 of Medicine)	1934 3		○	○		
27 脳研究室 (Brain Research Center)	1935 5					
28 内科東病室 (East Ward of Internal Dept.)	1936 3					○
29 工学部第三号館 (Bldg.3 of Engineering)	1936 11				○	○
30 工学部総合試験所 (General Lab. of Engineering)	1937 8		○	○		
31 農学部第三号館 (Bldg.3 of Agriculture)	1937 9		○	○		
32 外科病室 (Surgical Dept.)	1938 12					

※ Y/M: 各建物の着工年・月 (The year and month when construction started)

A : 岸田によって意匠設計が主導された建物 (Elevation designed by Kishida)

B1: 図書館と同様の柱型を持つ建物 (Similar pilasters of "Library")

B2: 図書館と同様のポーチを持つ建物 (Similar porch of "Library")

C1: 工学部第四号館と同様の柱型を持つ建物 (Similar pilasters of "Bldg.4 of Eng.")

C2: 工学部第四号館と同様のポーチを持つ建物 (Similar porch of "Bldg.4 of Eng.")

本研究が対象とする構内の主要校舎 32 棟を着工年順に一覧したものを、左表にまとめておく (Table 1) ^{注13)}。

2.2. 参照する資料

資料として、1) 写真資料・2) 図面資料・3) 文字資料を参照する。まず 1) 写真資料については、東京大学総合研究博物館小石川分館蔵東京帝国大学営繕工事記録写真帳 (以下、記録写真帳) を扱う^{注14)}。2) 図面資料については、東京都公文書館内田祥三資料 (以下、公文書館内田資料)・東京大学工学系研究科建築学専攻所蔵内田資料 (以下、東大内田資料) を参照する^{注15)}。3) 文字資料については、村松貞次郎が内田に対して行ったインタビューの内容を書き起こした「内田祥三談話速記録」 (以下、速記録) を主に用いる^{注16)}。

本研究では 1) 写真資料・2) 図面資料に依りながら、各建物の立面表現と設計過程について分析を行い、随時 3) 文字資料を参照することで、内田と岸田の協働関係や設計思想についても検証していく。なお、記録写真帳・東大内田資料は従来の研究では用いられていない資料であり、公文書館内田資料・速記録についても本郷キャンパスに関するものはあまり注目されてこなかった。本研究では、これら未開拓の資料を総覧し、当時の透視図・図面などを新たに発見した上で、内田と岸田の設計活動を分析していく。

2.3. 研究の構成

本研究ではまず第3章で、内田と岸田の設計活動の背景を理解するため、両者の様式観や設計思想について言説面から分析を行う。続いて個別の作品分析へと移り、まず第4章では、本郷キャンパスの基調をなすゴシック表現がどのように確立されていたのか分析する。第5章では、同時期に岸田によってゴシックとは異なる新表現が導入された過程を明らかにする。第6章では、その後、岸田が導入した新表現がどのように継承されていたのか検証する。最後に第7章では、以上の分析を踏まえて、本郷キャンパスにおける折衷表現とはどのような過程で成立・展開し、どのような性格を持っていたのか、総括を行う。

3. 内田と岸田の設計思想

本章では、1920-30年代において内田と岸田はどのような様式観や設計思想の下で、本郷キャンパスの設計活動に関与していたのか、それぞれの言説に注目して分析を行う。

3.1. 内田の設計思想

本郷キャンパスの設計活動に込められた様式観や設計思想については、速記録や帝国大学新聞から窺い知ることができる。まず内田は速記録の中で、関東大震災以前の構内の様式建築への評価を語っている。内田は「(大講堂の) 前にずっと並んでいる建物は…デザインが非常にいいのです。純粹のゴシックだけれども、ああいういいデザインのものを動かすのは考えられない」 (括弧内筆者) と述べている^{注17)}。「前にずっと並んでいる建物」とは、ジョサイア・コンドルの設計による法文科大学校舎 (1884 年竣工) や法科大学講堂 (1914 年竣工) などを指すものと思われ、内田はゴシック表現による様式建築を評価していたことが分かる。

また、自身で立面図の原案を描いた大講堂 (1923 年 1 月着工) について、内田は「ゴート式を採用したのは、あの講堂の周囲にあつた建物がすべてゴート式で然も英国風のゴート式であつたからそれと調和をはかるため」と述べている^{注18)}。つまり内田は、震災前の

様式建築の意匠に配慮した上で、大講堂の計画を行っていた。内田は続けて、「其後震災のために周囲の建物は全部焼失して仕舞つたから今なら…もつと自由な選択をすることが出来たらうと思ふ」と述べている。このことから内田は、様式表現を評価するばかりでなく、新たな表現の可能性にも理解を示していたことが窺える。

さらに、内田主導で設計がなされた図書館（1926年1月着工）の表現について、「既に出来てゐる法経研究室とは似た形、似た色合をもたせて」と述べている^{注19)}。すなわち、震災復興が進んでくると、今度は法経学部研究室など震災後の自身の作品との調和が配慮されていた。このように内田は、ゴシック表現自体に固執したわけではなく、意匠の調和を重視する中でゴシック表現を選択的に用いていた。

3.2. 岸田の設計思想

後述する通り、岸田が意匠設計を主導したのは1920年代前半に限られる。この間の岸田の様式観や設計思想が窺える資料として、1924年12月15日付の帝国大学新聞が挙げられる。「大学の建築に就いて」と題された記事の中で、岸田は「古きものを古きが故に捨て去る」愚をしてはならない」と述べており^{注20)}、震災前に建設された構内の作品を念頭に、過去の様式建築に対して一定の理解を示している。その上で「あの建物はよかつた。あの様な建物を建てるがよい」それは…余りに向上のない心ではないか」と述べており、安易に様式表現を模倣することを批判している。

それでは、当時の岸田は、どのような表現を目指していたのだろうか。続けて岸田は、「材料、構造が表現を本質的に決定するものではなくして唯或程度迄影響を与へたに過ぎない」と述べており、鉄筋コンクリート造などの新技術に対応して新たな表現が生まれるべきとする論には、留保を示している。その上で「如何なる姿で新しい大学は現れるであろうか…「時代とびつたり合致した建築」を自分を望む」と述べており、具体的な言明を避けながらも、新たな時代にふさわしい建築表現を模索していたことが窺える。

その後、約1年にわたる欧米外遊を行なった岸田は、作風を大きく変えることとなる。外遊後の岸田は1927年、学校建築の表現に関する記事の中で「四角であるべき筈の窓やポーチを三角にし丸くし、更らに複雑な尖頭形、パラボラ形にする」ような表現手法を批判している^{注21)}。後述する通り、外遊前の岸田は理学部第一号館などでアーチ型の開口表現を度々用いていたが、こうした表現主義的な造型を自ら否定するようになっていく。さらに、「窓やポーチの形も勿論四角なもののが最も正しいものだと思います。その理由は一言で言へば、経済といふ点からです」と述べており、合理主義的な観点から簡潔な表現を支持するようになった。

すなわち、1920年代前半、合理主義的な建築観に到達する以前の岸田は、様式建築の模倣を乗り越え、新たな時代にふさわしい建築表現を確立しようと模索していたことが窺える。

4. 内田によるゴシック表現の確立

本章では、個別の作品分析を通して、本郷キャンパス特有のゴシック表現がいかに成立し、どのような展開を見せたのか明らかにする。特に各建物の細部表現に注目しながら、1922-26年に着工された初期の5作品とその後の展開を対象として分析を行う。

Fig.1 2nd floor plan (top left), west elevation (bottom left), porch (top right) and pilaster (bottom right) of "Bldg. No.2 of Engineering Faculty"

4.1. 工学部第二号館（1922年6月着工）

1919年6月に工学部第二号館の設計を嘱託されて以降、内田は構内の設計活動に関与していく。工学部第二号館の設計について、内田は「（協力者は）ないのです。ぼくがやったということです」（括弧内筆者）と述べており^{注22)}、立面表現も内田によって決定されたものと考えられる（Fig.1左上）^{注23)}。

その立面構成は、外部に突き出た柱型を等間隔に割り付け、中央の柱間に入出口となるポーチを配するものであった。工学部第二号館は、鉄筋コンクリート造の柱梁構造からなるが、外部に面する構造柱の部分に被覆を施すことで、柱型が表現されている。つまり、鉄筋コンクリート造の柱配置を直接的に即して、ポーチや柱型が配されていたと理解できる（Fig.1左下）^{注24)}。その後の主要校舎では、全て鉄筋コンクリート造（もしくは鉄骨鉄筋コンクリート造）の柱梁構造が採用され、そのほとんどでポーチと柱型の表現が用いられた。本研究では、特にこれら2つの表現を本郷キャンパス校舎の特徴的な細部表現と捉え、これらに注目して分析を行っていく。

工学部第二号館においては、①ポーチは尖頭アーチ型の開口部を持つもので（Fig.1右上）、一方②柱型は頂部が石張りで途中にピナクルの装飾を持つバットレスのような表現（Fig.1右下）となっており、ゴシック的な特徴を示している。

4.2. 大講堂（1923年1月着工）

続いて着工されたのが、大講堂である。工学部第二号館の着工前、1922年2月に、内田は大講堂建築実行部建築掛長を嘱託されており、その翌月に岸田が大講堂建築実行部技師を嘱託されている。

大講堂の設計では、当初、内田によって平面や立面の計画案が作成され（Fig.2左）^{注25)}、その後、岸田によって細部表現が変更された（Fig.2右）^{注26)}。設計変更の前後で、平面上の柱配置は変更されておらず、中央にポーチを持ち等間隔に柱型を配する立面構成も保

Fig.2 Original (left) and revised (right) elevation of "Main Hall"

たれていた。このように大まかな建築構成を引き継いだ上で、ポーチと柱型の細部表現がゴシック的なものから、様式色の弱い表現へと変更された。当初、内田が描いた立面の計画案では、①尖頭アーチ型のポーチ・②バットレスのような柱型が用いられ、工学部第二号館と同様のゴシック的な表現となっている。

4.3. 工学部列品館（1923年6月着工）

続いて内田が設計に関与したのが、工学部列品館である。その柱型では、工学部第二号館・大講堂計画案と共通するゴシック的な表現を用いているが、頂部の石張りの部分が鋭い刃のような表現へと改変されている（Fig.3右）。さらに①ポーチについては、これまで用いられていた尖頭アーチ型の表現に代わって、柱頭装飾を持つ列柱が並び新たな表現が採用された（Fig.3左）。

Fig.3 Porch (left) and pilaster (right) of "Museum of Engineering Faculty"

4.4. 法経済学部研究室（1924年2月着工）

工学部列品館の着工直後、1923年7月に内田は営繕課長事務取扱を任じられ、東大営繕課の最高責任者となる。その後、1923年9月に関東大震災が発生し本郷キャンパスは多大な被害を受け、内田はその後の復興を一貫して率いていく。この震災後、最初に着工されたのが法経済学部研究室であった。

工学部列品館の向かいに建設された法経済学部研究室では、同様に①列柱が並ぶポーチと②頂部が鋭いバットレスのような柱型が用いられ、工学部列品館の立面を範として設計されたと考えられる。

4.5. 図書館（1926年1月着工）

その後、建設された図書館では^{注27)}、①列柱が並ぶポーチ（Fig.4左）と②頂部が鋭いバットレスのような柱型（Fig.4右）が見られ、工学部列品館・法経済学部研究室と類似した表現が用いられた。ただし、ポーチは上部の段上の縁取りが省略され、工学部列品館・法経済学部研究室の表現がやや簡略化されたようなものとなっている。

図書館の設計について、内田は「大学にある建物の中で僕が一番力を入れたのは図書館です。だから図書館では岸田君がやったというのは外部の方では殆んどないでしょう」と述べており^{注28)}、外観の立面意匠は内田によって決定されたものと考えられる。

Fig.4 Porch (left) and pilaster (right) of "Library"

4.6. その後のゴシック表現の展開

その後、1927年5月着工の法文経教室第一号館・第二号館から1937年9月着工の農学部第三号館まで計6作品で、図書館と同様の

Fig.5 Porch (left) and pilaster (right) of "Bldg. No.3 of Agriculture Faculty"

②頂部が鋭いバットレスのような柱型が用いられた（Fig.5右）^{注29)}。図書館と同様のポーチ表現も、計5作品で用いられている（Fig.5左）^{注30)}。逆に、図書館以前に、工学部第二号館や工学部列品館で用いられていた柱型やポーチの表現は全く用いられていない。従って、図書館における柱型とポーチの表現は、その後の設計活動の中でも範として参照され、繰り返し用いられていったと評価できる。

このように図書館の設計にいたるまで、細部表現には様々なバリエーションが見られたが、この間も、均等に柱型が並び中央にポーチを置く基本的な立面構成は一貫していた。すなわち内田は、一定の立面構成に従いながら、徐々に細部表現を改変していった。

5. 岸田による新表現の導入

本章では、1920年代前半の本郷キャンパスの設計活動における岸田の貢献について、岸田と内田の協働関係と各建物の立面表現に注目しながら検証を行う。さらにその前提として、岸田が技師を努めた東大営繕課はどのような組織であったのか、当時の営繕体制についても概観する。なお対象とする期間は、岸田が構内の設計活動に関与しはじめた1922年から、欧米外遊に出発する1925年までとする。

5.1. 内田率いる東大営繕課の営繕体制

1923年7月、内田が営繕課長事務取扱となって以降、東大営繕課は大きく規模を拡大させる。1919年時点の東大営繕課では、課長・書記・技手の計5名が在籍していたが、1923年には課長事務取扱・技師・書記・技手・嘱託の計15名、1924年には計19名へと急拡大を遂げている^{注31)}。中でも技師は、ほとんどが大学を卒業して間もない東京帝国大学出身者によって占められた。岸田はその一員として、1924年から東大営繕課技師となっている。このように、多くの技師を抱える東大営繕課であったが、独自の表現を用いたのはほぼ岸田に限られるため^{注32)}、本研究では岸田に注目することとする。

5.2. 大講堂（1923年1月着工）

1922年3月、岸田は東大営繕課技師となる前に大講堂建築実行部技師を嘱託され、構内の設計活動に関与しはじめる。大講堂の設計では、先述のように内田が作成したゴシック的な立面計画案に対して、岸田がその細部表現に変更を加えている。結果、大講堂の柱型は、ゴシック的な装飾を持たない曲面的な表現に置き換えられた。

このように変更が行われた背景として、佐野利器（1880-1956）の関与があった^{注33)}。当時、大講堂の計画の協議員を委嘱されていた東京帝国大学教授・佐野は、内田の立面計画案に対してゴシック色を弱めるようにとコメントを寄せている。

その後、岸田による変更案が採用された経緯について、内田は「大講堂の時は、塚本先生が委員長で、デザインの上手な人が多いのだからコンクールをしてきめてはどうですかと、おすすめした。塚本先生は…僕の案を押されたのだが、岸田君の案が相当新しい味もあり…これにはどうですかと…僕が頑張ってそうしてしまっ

た」と述べている^{注34)}。大講堂の設計では、東京帝国大学教授・塚本靖が実行部長を務めており、岸田の設計案を実現させるため、内田が塚本に対して積極的に働きかけていた。ゴシック表現を多用した内田だが、「新しい味」を持つ岸田の表現を高く評価しており、様式表現に代わる新表現に期待を寄せていたことが窺える。

5.3. 耳鼻咽喉科整形外科及精神科病室（1924年8月着工）

ほか1920年代前半に、岸田が関与した作品として、耳鼻咽喉科整形外科及精神科病室（以下、耳鼻咽喉科病室）がある。その設計について、内田は「大講堂を岸田君にやってもらっているから、これはある程度のことはすっかり任せて岸田君の思う存分にやってもらってもいいのじゃないかという気がして、元からコンクリートの打放しにでき上がっていたのを…岸田君にやってもらった」と述べている^{注35)}。すなわち、大講堂の設計における岸田の貢献を評価した内田は、既に躯体が完成していた耳鼻咽喉科病室の仕上げの設計を、岸田に担当させたことが分かる。

これまでの構内の作品はいずれも、柱梁構造に即して柱型を外部に現すものであった。一方、耳鼻咽喉科病室は柱梁構造からなるにも関わらず、立面が平坦な壁式表現によって仕上げられ、様式的な装飾も見られない（Fig.6左）。こうした意匠は、これまでの内田のゴシック的な立面表現とは全く異なるものであった。

さらに、耳鼻咽喉科病室では新たに、①建物の端部に突き出す出窓の表現・②立面の頂部に施されたタイル細工による凹凸表現・③窓廻りに巡らされたタイル細工による蛇腹表現といった、新たな表現が用いられた（Fig.6右）。このように岸田は、ゴシック的な細部表現に代わって、非様式的な細部表現を新たに導入していた。

Fig.6 Perspective (left) and detail (right) of "Department of Otolaryngology"

5.4. 薬学教室（1924年8月着工）

薬学教室の設計者は、岸田あるいは内田と岸田とされる両方の場合があり^{注36)}、これまで設計者が確定されてこなかった。薬学教室の立面は、平坦な壁式表現からなり、①端部の出窓表現・②立面頂部の凹凸表現・③窓廻りの蛇腹表現が用いられている。薬学教室と同月に竣工し、岸田が仕上げの設計を担当した耳鼻咽喉科整形外科療室でもこれらの表現が3つとも用いられていることから、薬学教室も岸田が意匠設計を担当したのと考えられる。

5.5. 急病者受付所（1925年7月着工）

他に岸田の関与が知られている作品として、急病者受付所が挙げられる。急病者受付所について、内田は「あれは全く岸田君がひとりでやった」と述べている^{注37)}。急病者受付所でも柱型は見られず、平坦な壁式表現が用いられており、細部表現としては②立面頂部の凹凸表現・③窓廻りの蛇腹表現が施され、耳鼻咽喉科病室と類似の表現を持つ。

急病者受付所が着工された1925年7月の『建築世界』には、岸田

Fig.7 Drawing of "Medical Office for Emergency"

Fig.8 Drawing of "Bldg. No.4 of Engineering Faculty"

による急病者受付所の透視図が掲載された（Fig.7）^{注38)}。透視図は、青みがかった色調・マッシブな植栽表現・強調された影の表現など、当時の岸田の表現主義的な画風を示している。

5.6. 理学部第一号館（1924年6月着工）

さらに岸田の関与が知られている作品として、理学部第一号館がある。理学部第一号館について、内田は「建てる時に、建てる部分のある部分だけをまったく白紙にして、これは君（岸田）の思うとおりにやってみてくれと頼んだ」（括弧内筆者）と述べており^{注39)}、立面の一部分の設計が岸田に任せられたと考えられる。

理学部第一号館でも平坦な壁式表現が用いられたが、耳鼻咽喉科病室のような細部表現は見られず、アーチ型の開口表現が多用されている。これは、合理主義に到達する以前の、岸田の表現主義的な作風を顕著に示すものと評価できる。

理学部第一号館の表現について、内田は「岸田君のやったものにこんなことを言っては失礼だが、ぼくは気に入らんですね」と述べており^{注40)}、その意匠を好まなかったようである。大講堂における岸田の意匠設計を高く評価していた内田だが、表現主義色の強い理学部第一号館の表現については、否定的に評価していた。

5.7. 食堂及賄所（1923年12月着工）

以上のような、平坦な壁式表現という従来とは全く異なる立面表現を、岸田が最初に用いたのはどの作品であったのだろうか。本研究では、食堂及賄所がその最初の作品であることを発見した。

食堂及賄所は小規模な建屋で資料も多く残されていないため、これまで注目されず岸田の作品として挙げられることもなかった。1927年1月号の『建築雑誌』では、東大営繕課設計による「東京帝国大学新築諸築建物」の1つとして、食堂及賄所の図面が掲載されている（Fig.9）^{注41)}。その立面は、柱型を持たず平坦な壁式表現からなり、内田のゴシック表現とは明確に異なる特徴を示している。さらに、耳鼻咽喉科病室や薬学教室と同様の端部の出窓表現が用いられていることから、意匠設計は岸田によるものと考えられる。

従来注目されてこなかった食堂及賄所だが、岸田が独自の壁式表現を導入する上での起点になった作品と評価できる。

Fig.9 Interior (top) and north elevation (bottom) of "Hospital and Dining Room"

5.8. 工学部第四号館（1924年4月着工）

1920年代前半、岸田は多くの作品で壁式表現を用いたが、工学部

第四号館では、柱型を外部に現す従来の立面構成が用いられた。工学部第四号館の設計者は、岸田あるいは内田とされる両方の場合があり、設計者が確定されてこなかった^{注42)}。ここでは、岸田がその意匠設計にどれほど関与していたのか検証を行なう。

本研究では新たに東大内田資料より、工学部第四号館の透視図を発見した (Fig. 8)。署名は確認できないが、急病者受付所透視図と同様の画風を備えており、同じく岸田画によるものと考えられる。このことから、工学部第四号館の意匠設計にも岸田が関与したことが示唆される。また内田も、工学部第四号館の設計について「これに協力してもらったのが岸田日出刀君、奥田芳男君、柘植芳男君、大沢邦吉君」と述べており^{注43)}、協力者の筆頭に岸田の名前を挙げている。

工学部第四号館の立面構成は、均等に柱型が並び中央にポーチを置くものであり、従来の立面構成が踏襲されている。しかし、ポーチ・柱型の細部表現は、内田のゴシック表現とは大きく異なっていた。まず柱型は、丸みを帯びた頂部を持つ曲面的な表現となっており (Fig. 10 右)、内田によるバットレスのような表現とは異なる特徴を持つ。ポーチについても、列柱などの様式的表現ではなく、マッシブな太柱の間にアーチが架けられた独特の表現となっている (Fig. 10 左)。こうしたマッシブで曲面的な細部表現は表現主義からの影響が窺え、岸田によって新たに導入されたものと考えられる。

以上の議論より、平面計画や立面構成など設計の一部に、内田の関与があった可能性は考えられるが、少なくとも表現主義的なポーチと柱型の表現については、岸田の設計によるものと判断できる。

Fig.10 Porch(left) and pilaster(right) of "Bldg. No.4 of Engineering Faculty"

5. 9. 岸田の表現がキャンパス景観に与えた影響

本章では、これまで注目されていない食堂及賄所や、岸田の関与があったか明らかでなかった薬学教室・工学部第四号館が、岸田の設計作品であると考えられることを示した。

以上より、1922年から1925年に着工された10棟の主要校舎のうち^{注44)}、7棟の意匠設計に岸田が関与したと考えられる。その表現は、いずれも様式的な装飾を持たず、内田のゴシック表現とは大きく異なっていた。従って、岸田は1920年代前半において、ゴシック表現を基調とするキャンパスの中に非様式的な新表現を大々的に導入したという点で、その景観形成に多大な影響を与えたと評価できる。

6. 内田によって継承された岸田の非様式表現

1920年代前半に構内の意匠設計を主導した岸田だが、1920年代後半以降、その貢献は限定的なものとなる。さらに、1930年には東大営繕課を退いており、その後は構内の設計活動にほとんど関与していない。しかしこの間も、岸田が導入した非様式的な新表現が、繰り返し用いられていた。

本章ではまず、1920年代後半以降、なぜ岸田は意匠設計を主導し

なくなったのか、その経緯を明らかにする。続いて、1920年代前半に岸田が導入した非様式表現が、その後どのように継承されていったのか、検証していく。さらに、様式表現と非様式表現は別々の作品で用いられるだけでなく、1つの作品の中で組み合わせられて用いられたことを明らかにする。

6. 1. 図書館以降の設計体制

1920年代前半に続けて7作品の設計を手掛けた後、1925年12月から1926年11月まで約1年間、岸田は欧米外遊を行った^{注45)}。この間に着工された図書館の設計において、内田と岸田の協働関係は大きく転換されることとなる。

図書館の設計は1925年以前から着手されており、同年1月号の『建築雑誌』には「東京帝国大学図書館建築図案」の1案として、外遊前の岸田が手掛けた透視図が掲載されている。この設計案について、内田は「営繕に関係した人の間で、図書館のデザインについてコンクールがあったが、(岸田先生の案は一等だった) …あまり気に入らず、すっかりやり直しました」と述べており^{注46)}、内田が気に入らなかったために採用されなかったことが分かる。

先述の通り、内田は理学部第一号館の表現も好まなかったが、それ以降の設計について「好き嫌いのところまで入れ注文を出すから、それに添うようにやってくれないか…岸田君は…ようございませうやってみますという話で…それからだんだんやって行ってみたが、どうもなかなか思うようにいかん。それで二百分の一は自分で書くようになった」と述べている^{注47)}。つまり、岸田による理学部第一号館の設計を好まなかった内田は、自ら指示を与えた上で岸田に設計させようとしたがうまく行かず、結局、自ら意匠設計を行うようになった。その転機となったのが、図書館の設計であったと考えられる。

6. 2. 工学部第四号館の周辺の作品

第4章では、内田が図書館で用いたゴシック表現が、その後も繰り返し用いられたことを指摘した。その一方で、岸田が用いた非様式的な細部表現についても、類似の表現が繰り返し用いられた。特に工学部第四号館で用いられたポーチ・柱型表現は、同様の細部表現が多くの作品で見られる。

工学部第四号館の着工から約6年後、1929年12月に着工された電気工学実験室の立面には、②丸みを帯びた頂部を持つ柱型表現が配されている。着工の5ヶ月前に描かれた電気工学実験室の立面図では (Fig. 11)^{注48)}、隣り合う工学部第四号館の立面が描かれており、立面表現の連続性が意図されていたことが窺える。

さらに約7年後の1936年11月に着工された工学部第三号館でも、工学部第四号館と同様の柱型・ポーチ表現が採用された。工学部第三号館も工学部第四号館・電気工学実験室と近接する位置に立地することから、建物間で意匠の調和が配慮されたものと考えられる。

内田は、電気工学実験室の設計について「協力者は奥田君」^{注49)}、

Fig.11 South elevation of "Laboratory of Electrical Engineering"

工学部第三号館の設計について「(協力者は) 吉田すすむ君と松下君」(括弧内筆者)と述べており^{注50)}、協力者として岸田を挙げていない。従って、岸田が導入した細部表現と同様のものが、その後、内田や他の営繕課技師によっても用いられていたことが分かる。

6.3. 附属病院の建築群

他にも、工学部第四号館と同様の細部表現が繰り返し用いられたのが、附属病院の一連の建築群であった。工学部第四号館の着工から約3年後、1926年12月に着工された内科病室・隔離病室では、工学部第四号館以降、②丸みを帯びた柱型表現が初めて用いられた(Fig. 12 右)。その後、1931年3月着工の内科及小児科研究室・医院事務室薬局及外来患者診療所(以下、外来患者診療所)でも、一貫して②丸みを帯びた頂部を持つ柱型表現が用いられた。これら4棟は附属病院として一体的な建築群を形成しており、同様の表現を用いることで意匠の調和が図られていたと考えられる。

Fig.12 Elevation (left) and pilaster (right) of "Internal Department"

以上の作品のように、本郷キャンパスでは1930年代後半にいたるまで、工学部第四号館と同様の①ポーチ・②柱型表現がそれぞれ計5作品・計6作品で用いられている^{注51)}。すなわち、岸田が工学部第四号館で用いた表現は、岸田が構内の設計活動に関与しなくなった後も、内田や他の営繕課技師によって定型表現として繰り返し用いられることで、キャンパス景観の形成に影響を与えつづけていたと評価できる。

なおこの間も、図書館と同様のポーチ・柱型表現は並行して用いられており、様式表現が非様式表現へと取って代わられるのではなく、逆にゴシック一色に表現が統一されることもなかった。このように、様式表現と非様式表現が同時期に併用されつづけた背景には、一方の表現に固執するわけではなく、建物間の調和に配慮して表現を使い分ける、内田の折衷主義的な設計態度が反映されていたと考えられる。

6.4. 医学部第一号館における様式／非様式表現の折衷

工学部第四号館の表現主義的な細部表現は、時にゴシック表現と組み合わせて用いられた。その典型的な作品が、医学部第一号館(1928年3月着工)である。ここでは医学部第一号館を例に、様式／非様式表現がどのように組み合わせられていたのか、分析を行う。

医学部第一号館の①ポーチは、マッシブな太柱からなり(Fig. 13 左)、工学部第四号館の表現と同様のものであった。一方②柱型は、

Fig.13 Porch (left) and pilaster (right) of "Bldg. No.1 of Medical Faculty"

ピナクルのような装飾を持たないものの、鋭い石張りの頂部を有しており(Fig. 13 右)、図書館の柱型表現と共通した特徴を示している。

このような立面はどのように生み出されたのだろうか。本研究では東大内田資料より、着工の約1年前、1927年2月に描かれた医学部第一号館の東側正面の計画案を発見した(Fig. 14 左)^{注52)}。計画案は、実際に建設された実施案(Fig. 14 右)^{注53)}とほぼ同様の立面構成を持つが、細部表現に違いが見られる。計画案では、実施案と同様に①マッシブな太柱によるポーチが見られる一方、②柱型は丸みを帯びた柱型表現が用いられており、ポーチ・柱型ともに工学部第四号館と同様の細部表現が用いられていた。

このことから、医学部第一号館では当初、工学部第四号館の立面表現を範として設計がなされていたが、途中の設計変更によりゴシック的な柱型表現が加えられ様式色が強められたと考えられる。

Fig.14 Original (left) and revised version (right) of east elevation of "Bldg. No.1 of Medical Faculty" (partially magnified)

6.5. 様々な折衷表現の展開

ゴシック／表現主義による2つの細部表現が初めて組み合わせられて用いられたのは、1926年8月着工の農学部第一号館においてであった。農学部第一号館の②柱型は、途中にピナクルの装飾を持つバットレスのような表現でありながら、頂部は丸みを帯びた曲面的な表現となっており(Fig. 15 中央)^{注54)}、図書館の様式表現と工学部第四号館の非様式表現を組み合わせたとの特徴を有する。一方の①ポーチは様式的な表現となっていることから、様式表現を基調としながらも様式色を弱めようと意図されたものと推測される。

1931年3月着工の外来患者診療所では(Fig. 15 右)、②柱型は丸みを帯びた柱型表現によるが、①ポーチは列柱が並ぶ表現が用いられており、工学部第四号館の非様式表現と図書館の様式表現とが併用されている。外来患者診療所を含む一連の附属病院のうち隔離病室では、①ポーチ・②柱型ともに工学部第四号館の表現を継承しているのとは対照的である。外来患者診療所は一連の附属病院の正面中央に位置することから、ゴシックによるポーチ表現を採用することで、格式高く正面性の強い立面表現を狙ったものと考えられる。

以上のように、本郷キャンパスでは計6作品において、様式／非

Fig.15 Elevation (left) and pilaster (center) of "Bldg. No.2 of Agriculture Faculty" / Elevation (right) of "Hopital for outpatient"

様式表現を組み合わせた折衷表現が用いられた^{注55)}。そこでは、様式／非様式表現は相容れないものではなく、折衷可能な細部表現のバリエーションとして扱われていた。ここにも、様々な表現を使い分ける、内田の折衷主義的な設計態度が反映されていたと評価できる。

様式／非様式表現が組み合わされる際には、様式色を弱めたり強めたりして印象を調整する効果が意図されていたと考えられる。すでに大講堂（1923年1月着工）の設計において内田は、自身が描いた様式的な立面原案に対して、岸田による非様式的な細部表現を取り入れることで様式色を弱めていた。医学部第一号館・農学部第一号館・外来患者診療所でも同様に、様式色を強めたり弱めたりする設計過程の中で、結果的に特有の折衷表現が現れたと考えられる。

7. 結論：内田による折衷表現の成立と展開

以上、第3章から第6章の分析を通して、①1920年代前半、内田によってゴシック表現が確立される一方、②同時期に岸田によって表現主義的な新表現が導入され、③1920年代後半以降、内田によって様式／非様式表現が併用されつつける中で、それらが組み合わされた特有の立面表現が現れていった過程を明らかにした。

Fig.16 Distribution of major buildings in Hongo campus (1922-1938)

様式建築を乗り越えようとした岸田に対して、内田はキャンパスにおける様式表現の伝統を尊重し、同時に様式表現に代わる新表現にも期待を寄せていた。だからこそ1920年代前半、内田自身は様式表現を用いる一方で、非様式表現を用いる岸田に多くの設計の機会を与えていた。

その後1920年代後半以降、再び内田が設計活動を主導するが、ここでは内田が図書館で用いた様式表現と、岸田が工学部第四号館で

用いた非様式表現が併用されつづけた。図書館の表現は法文経教室第一号館（1927年5月着工）以降、工学部第四号館の表現は内科病室（1926年12月着工）以降繰り返し用いられ、そこで様式／非様式表現を併用する折衷主義的な設計手法が方向づけられた。

さらに同時期の農学部第一号館（1926年8月着工）ではすでに、同一立面上で様式／非様式表現を組み合わされて用いられており、ここで初めて折衷表現が登場した。その後、医学部第一号館（1928年3月）では、柱型のみを様式表現とした折衷的な立面が、外来患者診療所（1931年3月着工）では、ポーチのみを様式表現とした折衷的な立面が用いられている。これらの作品では、様式色を強めたり弱めたりすることが意図されており、結果、様々なバリエーションの折衷表現が生み出されていった。

このように折衷表現が多用された背景には、特定の表現に固執しない、内田の設計態度が反映されていたと考えられる。内田は、最初の作品である工学部第二号館から一貫して、柱型が均等に並び中央にポーチを置く立面構成を用いており、その構成に従った上で様々な柱型・ポーチ表現を使い分けていた。その際に内田が重視したのは、建物間の意匠の調和であった。大講堂や図書館の周辺では、キャンパスの伝統を継承してゴシック表現が繰り返し用いられる一方、附属病院や工学部第四号館の周辺では、岸田の表現を引き継ぎ表現主義的な細部表現が用いられた（Fig.16）。このように内田は、様式／非様式表現の一方に固執するのではなく両者を併存させる折衷主義的な設計手法によって、各校舎の意匠に調和と変化を与えながら本郷キャンパスの景観を形づくっていったと評価できる。

参考文献

- 1) Tsunematsu Y.: Kishida Hideto's Design of the Hongo Campus of Tokyo Imperial University, Summaries of Technical Papers of Annual Meeting, Architectural Institute of Japan, History and Theory of Architecture, pp. 247-248, 2020. 7
常松祐介：東京帝国大学本郷キャンパスにおける岸田日出刀の設計活動 内田祥三との協働による意匠設計，日本建築学会大会学術講演梗概集，建築歴史・意匠，pp. 247-248, 2020. 7

注

- 注1) 藤森照信『日本の近代建築 上』（岩波書店、1993年、p.234）、同『日本の近代建築 下』（p.83）
- 注2) 大正期・昭和前期のキャンパス空間を扱った代表的な研究として、次のようなものが挙げられる。宮本雅明『日本の大学キャンパス成立史』（九州大学出版会、1989年）、木方十根「創設期名古屋帝国大学の学園計画」（『日本建築学会計画系論文集』69巻577号、2004年）、横手義洋「建築家ラルフ・アダムス・クラムの津田塾大学キャンパス計画に関する研究」（『日本建築学会計画系論文集』77巻671号、2012年）、内山隆弘「東北大学キャンパスの建築デザイン・景観の変遷について」（『日本建築学会東北支部研究報告集』82号、2019年）
- 注3) 赤尾光司・後藤春彦・三宅論・米山勇「早稲田大学西早稲田キャンパスの景観形成過程に関する研究 佐藤功一の都市美論と営繕組織の活動を通して」（『日本建築学会計画系論文集』64巻519号、1999年）。佐藤功一の都市美論については、米山勇『佐藤功一の「建築—都市」観とその影響に関する史的研究』（早稲田大学学位論文、2005年）に詳しい。
- 注4) 内田の経歴については、内田祥三先生眉寿祝賀記念作品集刊行会編『内田祥三先生作品集』（鹿島研究所出版会、1969年）を参照した。
- 注5) 東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会編『東京大学本郷キャンパスの百年』（東京大学総合研究資料館、1988年、p.22）において、鈴木博之は「スクラッチ・タイル・ゴシックともよぶべき、ひとつの統一ある建築群」と評価している。このように、「内田のゴシック表現によって

- 統一された景観」という面が強調される一方で、「内田と岸田の協働」や「表現の多様性」についてはほとんど注目されてこなかった。
- 注 6) 勝原基貴『大正・昭和戦前期における岸田日出刀の近代建築理念に関する研究』（日本大学学位論文、2016 年、p. 20）では、卒業設計や大講堂の表現から、当時の岸田が表現主義の影響を受けていたと評価している。
- 注 7) 前掲勝原論文や藤尾直史「東京大学の震災復興と岸田日出刀 学術標本一般・建築・物的基礎の生産に関する基礎研究 (2)」(『日本建築学会四国支部研究報告集』4 巻、2004 年) では、構内の岸田作品として、大講堂・理学部第一号館や、木造仮校舎の山上御殿・教官食堂が挙げられている。しかし両研究では、これら一部の作品の分析を行うに留まり、岸田と内田の関係や 1920 年代後半以降の展開について注目されていない。
- 注 8) 以下の 4 冊では、本郷キャンパスにおける岸田作品として、大講堂・工学部第四号館・理学部第一号館・耳鼻咽喉科病室・薬学教室・急病者受付所などが挙げられてきた。しかし岸田がどの程度、意匠設計に関与したのか、検証されていない。①「岸田先生主要作品」(『建築雑誌』、1966 年 8 月号)、②長谷川堯「大正建築の史的素描 建築におけるメス思想の開花を中心に」(『建築雑誌』、1970 年 1 月号)、③「岸田日出刀」編集委員会編『岸田日出刀』(相模書房、1972 年)、④日本建築学会編『日本近代建築総覧 各地に遺る明治大正昭和の建物』(技報堂出版、1980 年)。
- 注 9) 杉山貴則『内田祥三のファサード構成 東大本郷キャンパスを中心として』(東京大学卒業論文、1991 年)
- 注 10) 東京大学編『東京大学大講堂 (安田講堂) 改修工事報告書』(東京大学、2016 年、p. 36) では、大講堂の設計における内田と岸田の協働が指摘されている。しかし、その他の作品における両者の協働関係は検証されてこなかった。
- 注 11) 岸田の経歴については、前掲『岸田日出刀』・前掲勝原論文を参照した。
- 注 12) 具体的には、内田が 1919 年 6 月に工学部講堂並教室及実験室新築工事設計を嘱託され構内の設計活動に関与し始めた後、1923 年 7 月に営繕課長事務取扱を任じられ、その後 1938 年にその任を退くまでを扱う。
- 注 13) 1919 年から 1938 年の間に着工した構内の主要校舎を対象とする (木造の仮校舎は除く)。各建物の名称は、戦前の建設活動が一段落した時点の「東京帝国大学構内建物配置図」(『東京帝国大学一覧』、東京帝国大学、1941 年) における呼称で統一する。
- 注 14) 当写真帳は、東京大学総合研究博物館小石川分館によるウェブサイトで公開されている (<http://umdb.um.u-tokyo.ac.jp/DAnnex/photobook/home.php>、最終閲覧日 2020 年 8 月 1 日)。記録写真帳では、1920-30 年代の構内建物の竣工写真が多数掲載されており、そこから各建物の竣工当初の意匠が確認できる。本論文で掲載した写真は全て、当写真帳所蔵のものである。
- 注 15) これらのアーカイブでは、内田や岸田が描いた図面や透視図が多数所蔵されており、そこから当時の設計過程が窺える。
- 注 16) 1968 年 2 月から 11 月にかけて全 16 回にわたって、村松貞次郎が内田に対してその業績について聞き取りを行った。その原稿が校訂されたものが、内田祥三・村松貞次郎「内田祥三談話速記録 (一) ~ (八)」(『東京大学史紀要』、19 ~ 26 号、2001 ~ 2008 年) として公開された。この中で内田は、各建物の設計に東大営繕課の誰が関与したのか述べており、営繕課における協働関係の内実を知ることができる。
- 注 17) 前掲「内田祥三談話速記録 (二)」(p. 65)
- 注 18) 「周囲との調和に苦心した 内田営繕課長の談」(『帝国大学新聞』、1924 年 11 月 3 日付)。当該引用部分については、藤尾直史「東京大学大講堂・図書館の設計をめぐる 学術標本一般・建築・物的基礎の生産に関する基礎研究 (1)」(『日本建築学会四国支部研究報告集』4 巻、2004 年) でも紹介されている。
- 注 19) 「調和に苦心した耐震と便利と 内田工学博士談」(『帝国大学新聞』、1926 年 1 月 1 日付)。当該引用部分については、前掲「東京大学大講堂・図書館の設計をめぐる」でも紹介されている。
- 注 20) 岸田日出刀「大学の建築に就いて」(『帝国大学新聞』、1924 年 12 月 15 日付)。当該引用部分については、前掲「東京大学の震災復興と岸田日出刀」で紹介されている。
- 注 21) 岸田日出刀「学校建築と表現」(『建築世界』、1927 年 7 月号)
- 注 22) 内田祥三・村松貞次郎「内田祥三談話速記録 (七)」(『東京大学史紀要』、25 号、2007 年、p. 64)
- 注 23) Fig. 1 左上は「東京帝国大学工学部新館建築設計図」(『建築雑誌』、1924 年 3 月号) 掲載。

- 注 24) Fig. 1 左下は公文書館内田資料所蔵。
- 注 25) Fig. 2 左は東大内田資料所蔵。
- 注 26) Fig. 2 右は「東京帝国大学大講堂」(『建築雑誌』、1925 年 6 月号) 掲載。
- 注 27) 法経済学部研究室の着工後、図書館が着工されるまでに 5 作品が着工されているが、これらの意匠設計には内田特有のゴシック表現は見られなかった。その経緯については、第 4 章参照。
- 注 28) 「内田祥三先生のお話」(『岸田日出刀 上』、相模書房、1972 年、p. 153)。1970 年 2 月、吉武泰水は内田に対して岸田に関する聞き取りを行い、その原稿が本書に収録されている。
- 注 29) 法文経済学部第一・二号館・工学部第一号館・医学部第二号館・総合試験所・農学部第三号館。また前掲『内田祥三先生作品集』には、1937 年 8 月に内田自身が描いた外科病室の立面図が掲載されている。つまり、内田は 1937 年にいたるまで、自ら意匠設計に関与していたことが分かる。
- 注 30) 医学部第二号館・内科及小児科研究室・外来患者診療所・総合試験所・農学部第三号館。
- 注 31) 内田率いる東大営繕課の組織については、「内田祥三と内田スクール営繕課の役割」(『東京大学本郷キャンパス 140 年の歴史をたどる』、東京大学出版会、2018 年) を参照した。東大営繕課の職員構成については、『文部省職員録』(文部大臣官房秘書課、1916 ~ 1943 年) による。
- 注 32) 他に東大営繕課技師の土岐達人は、内科東病室でモダニズム色の強い表現を用いたが、その影響は単体の作品に留まっている。
- 注 33) 前掲『東京大学大講堂 (安田講堂) 改修工事報告書』(p. 36)
- 注 34) 前掲『岸田日出刀 上』(pp. 153-154)
- 注 35) 内田祥三・村松貞次郎「内田祥三談話速記録 (二)」(『東京大学史紀要』、20 号、2002 年、p. 33)
- 注 36) 薬学教室の設計者は、前掲『岸田先生主要作品』では岸田、前掲『日本近代建築総覧』では内田と岸田とされている。
- 注 37) 前掲『岸田日出刀 上』(p. 151)
- 注 38) 「病院夜間診療所 工学士 岸田日出刀作」(『建築世界』、1925 年 7 月号)
- 注 39) 前掲「内田祥三談話速記録 (二)」(p. 33)
- 注 40) 前掲「内田祥三談話速記録 (二)」(p. 33)
- 注 41) 「東京帝国大学医学部附属医院贈所」(『建築雑誌』、1927 年 1 月号)
- 注 42) 工学部第四号館の設計者は、前掲『岸田先生主要作品』では岸田、前掲『日本近代建築総覧』では内田とされており、その根拠は示されていない。
- 注 43) 前掲「内田祥三談話速記録 (七)」(p. 64)。奥田芳男は 1926 年、柘植芳男は 1928 年、大沢邦吉は 1924 年に東大営繕課技師となっている。
- 注 44) Table 1 参照。
- 注 45) 勝原基貴・大川三雄「大正末の海外渡航での岸田日出刀の主な訪問都市について」(『日本建築学会大会学術講演梗概集 (北海道)』、2013 年 8 月)
- 注 46) 前掲『岸田日出刀 上』(p. 153)
- 注 47) 前掲「内田祥三談話速記録 (二)」(p. 33)
- 注 48) 東京都公文書館所蔵。「Y. Uchida」の署名と内田の押印が見られ、「昭和四年七月十九日」と記入されている。内田が自ら描いたか、他の営繕課技師が描いた図面を内田が確認したものと考えられる。
- 注 49) 前掲「内田祥三談話速記録 (七)」(p. 59)。「奥田」は、先述の東大営繕課技師「奥田芳男」を指すと考えられる。
- 注 50) 前掲「内田祥三談話速記録 (七)」(p. 63)。「吉田すすむ」は「吉田貢」、「松下」は「松下清夫」を指すと考えられる。吉田貢は 1927 年に東大営繕課技師、松下清夫は 1935 年に東大営繕課嘱託となっている。
- 注 51) 工学部第四号館と同様のポーチ表現が見られるものとして、隔離病室・医学部第一号館・理学部第二号館・内科東病室・工学部第三号館、工学部第四号館と同様の柱型表現が見られるものとして、内科病室・隔離病室・電気工学実験室・内科及小児科研究室・外来患者診療所・工学部第三号館が挙げられる。工学部第四号館の細部表現が繰り返し用いられる一方で、1920 年代前半に岸田が多用した平坦な壁式表現は、その後、地震研究所・脳研究室など限られた作品でしか見られない。
- 注 52) 「Y. Uchida」の署名が見られ、「昭和五年二月二十?日」と記入されている(「?」は判読できず)。内田が自ら描いたか、他の営繕課技師が描いた図面を内田が確認したものと考えられる。
- 注 53) Fig. 14 右は日本建築協会編『学校建築図集』(日本建築協会、1934 年) 掲載。
- 注 54) 農学部第一号館の向かいに建設された農学部第二号館(1932 年 8 月着工)でも、同様の折衷的な柱型表現が用いられた。
- 注 55) 農学部第一号館・医学部第一号館・理学部第二号館・内科及小児科研究室・外来患者診療所・農学部第二号館。

UCHIDA YOSHIKAZU'S ECLECTIC DESIGN OF THE HONGO CAMPUS OF TOKYO IMPERIAL UNIVERSITY

The Collaboration between Uchida Yoshikazu and Kishida Hideto

Yusuke TSUNEMATSU^{*1}

^{*1} Grad. Student, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, The Univ. of Tokyo, M.Eng.

This paper examines how the eclectic design of the Hongo Campus of Tokyo Imperial University was developed through the collaboration between Uchida Yoshikazu and Kishida Hideto. Uchida began designing a building on the Hongo campus in 1919. After the Great Kanto Earthquake of 1923, he took the initiative in planning the new campus until 1938. Kishida helped design buildings on the campus as a subordinate architect from 1922–1930. Previous studies mainly focused on the uniformity of the collegiate gothic style on the Hongo Campus, but overlooked the variety of expressions that resulted from the collaboration between Uchida and Kishida. This paper analyzes the variation and development of designs on the campus during the 1920–30s and connects it to the relationship between Uchida and Kishida.

In the early the 1920s, Uchida applied the gothic style as the standard design in accordance with the design of older buildings on the campus. He consistently adopted a basic pattern of elevations that was characterized by a porch at the center and evenly aligned pilasters. He established his typical gothic style of a porch and pilasters through a series of designs five buildings.

During this period, Uchida also let Kishida design the elevations of seven buildings. Under the influence of German expressionism, Kishida attempted to overcome the historicist style at the time. Consequently, Kishida introduced modern-style designs to the gothic-style campus. Kishida's elevation designs during this period can be categorized into two types: 1) the elevation with flat walls, which can be observed in "Department of Otolaryngology Building", and 2) the elevation with a porch and pilasters, which can be found in "Building No. 4 of the Faculty of Engineering". The first type had no pilasters, which were totally different from Uchida's basic pattern of elevations. The second type had the modern-style porch and pilasters that are characteristic of expressionism, but it had the same basic pattern of elevations as Uchida's designs.

Since the late 1920s, buildings on the campus were designed mainly by Uchida because the collaboration between Uchida and Kishida did not go as planned. After Uchida designed "Library" in 1925, he repeatedly applied its gothic-style porch and pilasters all across the campus. On the other hand, Uchida also repeatedly adopted the expressionist-style porch and pilasters, which Kishida had applied in his design for "Building No. 4 of the Faculty of Engineering." Uchida adopted this style, particular in the proximity of the aforementioned building and the "University Hospital," which indicated the importance he placed on the aesthetic harmony of adjacent buildings. Furthermore, in "Building No. 1 of the Faculty of Medicine," the gothic-style pilasters and the expressionist-style porch were utilized in combination in one elevation, which displayed a mixture of the historicist and modern styles on the Hongo Campus.

Through the analysis of these designs, this paper concludes that Uchida did solely follow the gothic style, but in fact had an eclectic design style. When designing a building, he adopted either the gothic style or the expressionist style based on the designs of the surrounding buildings. On the other hand, Kishida criticized the historicist style and introduced expressionist-style designs. The collaboration between these two architects contributed significantly to the unique design of the Hongo campus, which is characterized by the harmonious merger of two different styles.

(2020年9月3日原稿受理, 2020年12月17日採用決定)